

# 山と博物館

第28巻 第7号

1983年7月25日

大町山岳博物館



鹿島槍夏雲 撮影 斉藤忠彦

## 豊かな山登りのために

山は、そこを訪れる人々を、わけへだてなく様々にもてなしてくれる。

藪山は藪山なりに、岩山は岩山なりに、雨の日には雨の山の風情をこめて。

けれども、もてなしの良し悪しは、そこを訪れる客の心のあり方にも半ばの責任があるものだ。

私は自分の反省をこめて、「足元だけしか見て歩かない人には、山はそれだけのもてなししかしてくれないよ」と若い人達に云うのだが、そういう口の下で、あの担々とした山麓の林道を、一刻も早く通り抜けてしまおうと足を速め、樹木や草などには目もくれずに登降してしまったりすることが多い。

それは、あまりにも自然に対しても無知であるからで、せっかくの山旅をとんでも貧困なものにしてしまっているのである。

登山の楽しさは、勿論、その困難や労苦に耐え、それを克服する闘いとの統一にあるわけで、スポーツとしての登山は記録の優秀でよいわけだが、それだけでは登山の楽しさの質的側面を表わしているに過ぎない。

登山の楽しさ・喜びをより豊かなものにするのは、自然への理解・知識を深めることではないだろうか。つまり、山の楽しさの大小は自己の豊かさの反映なのである。

登山者にとって、そのための絶好の施設が、「山岳博物館」である。私自身、せっせと山に通っていた若い頃には、博物館に足を向けたことがなかった。それだけに、登山をされる方々が、山の帰りについでに寄ってみるのではなく、折りにふれて館の利用をされることをお薦めしたいと思う。忙しい館の諸先生も、喜んでご指導下さると思う。

逝くなつた湯川秀樹博士が、「(学問の)浮気のすすめ」をいわれたことがある。地形・地質も、動植物の生態も、歴史も民俗も、いや高山植物や山菜だけでも知っているだけで山は一層楽しいものになる筈である。

(日本勤労者山岳連盟 高橋伸行)

# 農具川による大町市の開発

## — 古代・中世を軸にして —

### 小 穴 喜 一

はじめに

木崎湖に取水口をもつ農具川は、末端社地区開田で高瀬川に合流し、河道総延長は直線距離で約九・八kmである。この間の流路は鹿島川・高瀬川両扇状地の押出しにより東方へ圧迫され、東部山地の山麓直下を流下する。高瀬川、鹿島川の激流、冷水に比し、屈曲蛇行して緩流、しかも常時水量安定して水温も高く、従って両岸より分派した用水路は、旧平、大町、社地区の古代中世に溯る水田開発と集落の成立を可能ならしめた。しかし農具川による水田開発と集落成立にかかわる古文獻は皆無である。ここではその開発経緯追究の手掛りを得るため、明治二四・二五年調整の各村の地籍図(縮)にある水路ならびに土地台帳附属の地名を基礎に、現場における水



農具川の緩流 松崎、花見地籍付近の旧河道

路の展開形態、交叉形態、堰敷形態や耕土の深さを調べ、なお埋蔵文化財、古社寺、近世文書を交えて検討した。

一、三本の幹線水路による借馬の開発

江戸時代の古地図(享保五年)に木崎湖は海之口池と記されている。海之口池の水は湖底の湧水が主で水量安定し、ために農具川への流出量も増減なく、水温摂氏二七・五度(昭和五)・PH七・一呼称の如く理想的な灌漑溜池である。機能からみた溜池分類ではダムの溜池(開発型)に該当する。しかも自然がつくった巨大溜池である。農具川への流出口は、中禅寺湖の華厳滝や諏訪湖の釜口水門の如く急流でなく(秒速〇・二五m(七・四呎)の緩流である。従って往古から池水を調節し有効に活用するため栓口が設置されていたことは、「栓場」地名がこれを実証している。

他の河川と異り仁科三湖を貫流するので、沈砂作用と温水作用をうけ、降雨時にも濁流することなく、水温も他の河川(鹿島川、高瀬川)に比べ高い。やしろ」によれば栓場に「栓口定め」(文化元年)による幅七間、高さ六尺の三口よりなる栓口が設置され、大町、借馬、木崎の三ヶ村が管理した。流末まで水がとどかない時は、館之内、松崎が参加し栓口を下げて水量を増し、栓口操作の人は借馬、木崎両村があたる慣行である。栓口のやや下流の三間橋で本川(農具川)・中堰(中沢)・上堰に分派する、一点を要し幹線が三本に分派する形態は、農具川が安定水量であることを実証している。

三本の水路が灌漑する旧平地区の水田地帯は、借馬遺跡が実証する如く、耕土深く安全地帯で、しかも道水容易であり、古代中世に

は鹿島川水系の越荒沢による開発より一步先行している。本川より分派する中心水路ははり(榛の異名)川で、川名の呼称は自然流即用水路を実証し、ここには飯島・五郎宮の地名注目されるのはこの灌漑範囲に展開する。

・灰釉陶器を伴う住居址が発掘され、古墳時代から平安時代後期までの集落址が発見された(仁科路)姿をあらわした古代農村篠崎健一郎氏)微地形上当時の水田もはり川水系により灌漑されていたはずである。

中堰(中沢)は木崎、借馬地籍の広大な原野を水田開発するため開きされたことは、分派する幾多の網細管水路の展開形態が実証している。特にトドメキ地籍を要し鳥趾状に分派展開し、中堰(中沢)が意図した開発の中心的な役割は、耕土の深い借馬の原野開発であることを実証している。その未流は後に大町地籍へも延長され、町川(南荒沢)を横断して市内の弾誓寺堰まで延びている。

上堰のわらいは借馬集落の固定であること、三間橋の分水点から借馬の中心まで、最短距離をとって一直線に開きかざれていることから感知される。しかも木崎の小枝堰以外は枝堰を分派せず、明らかに借馬の飲用水を充すための水路であり、当初は灌漑用水路でなかつた。借馬の中心にはラタチクネ・クネ元・サンカイト等の中世土豪の居館を物語る古地名がある。上堰の取水口が中沢とは別でそのやや上流地点で取水しているのも、清浄水を土豪屋敷へ直接導水したことを物語っている。なお古代交通路の駅の存在を物語る「馬口」地名があり(長野県の地名)、集落の南端に南出口、市道、北端に追分の地名があり、往古はここが交通上の古集落であった。この借馬固定のため上堰が開きかざられていた。鹿島川水系の北荒沢より導水した借馬の北村堰は上堰より後の開きかざであることは、両水路のT字型交叉形態が実証している。つまり中堰(中沢)は借馬の水田開発水路として、上堰

は借馬の飲用水路として開きかざされ、借馬は成立固定した。しかし中堰、上堰は借馬遺跡に導水されたと推考されるはり川より後期の水路であることは、両水路のT字型交叉形態が実証し、はり川による原始開発が先行し、次に中堰、上堰による計画的開発へと進展している。

二、分水の成立

分水村は農具川左岸の安全な微高地に立地し、分水堰によって成立した。右岸のはり川よりやや下流地点で農具川より極めて無理なく取水している古堰である。原始集落神の五郎宮が、かつて水田中に鎮座(現袋野神社)し、対岸のはり川による飯島・五郎宮地籍の開発との密接な関係を暗示した古社である。分水の呼称は、微高地へ農具川よりわざわざ導水して集落を固定したことに起因する呼称と感知する。西側の借馬成立経緯と相似した経緯をもつのが、東側の集落分水ではなからうか。更に想像の拡大が許容されるならば借馬遺跡の退転は、中世に至り生産性の高い優良地を農地とし、生産性の低い土地に集落を移動せしめた各地にみられる中世庄園時代の権力者(ここでは仁科氏)による開発政策が、ここにも行われ、借馬遺跡から西側の借馬へ、東側の分水へと漸次集落移動が行われたのではなからうか。ちなみに借馬、分水間には二本の古道が直通して結ばれ(明治四十四年)、その中央地点が借馬遺跡の古田地帯であることが、この経緯を暗示しているのではなからうか。

三、町川(荒沢ノ川)による大町の誕生

平安期に溯る原初の大町は町川の開きかざりによって出発している。町川の取水口位置は、灌漑用の相栓川と並列した水門で農具川より取水し、追分地籍に至る。この間の堰筋は糸魚川街道より分岐する善光寺道に沿っており、秒速〇・四一〇・五mの緩流で水田入を極めて無理なく流下し、素朴な古堰を直観させる。農具川は厳冬中も凍結することなく流下し、ために冬期間の飲料水も安定し、勿論豪雨に

は借馬の飲用水路として開きかざされ、借馬は成立固定した。しかし中堰、上堰は借馬遺跡に導水されたと推考されるはり川より後期の水路であることは、両水路のT字型交叉形態が実証し、はり川による原始開発が先行し、次に中堰、上堰による計画的開発へと進展している。

二、分水の成立

分水村は農具川左岸の安全な微高地に立地し、分水堰によって成立した。右岸のはり川よりやや下流地点で農具川より極めて無理なく取水している古堰である。原始集落神の五郎宮が、かつて水田中に鎮座(現袋野神社)し、対岸のはり川による飯島・五郎宮地籍の開発との密接な関係を暗示した古社である。分水の呼称は、微高地へ農具川よりわざわざ導水して集落を固定したことに起因する呼称と感知する。西側の借馬成立経緯と相似した経緯をもつのが、東側の集落分水ではなからうか。更に想像の拡大が許容されるならば借馬遺跡の退転は、中世に至り生産性の高い優良地を農地とし、生産性の低い土地に集落を移動せしめた各地にみられる中世庄園時代の権力者(ここでは仁科氏)による開発政策が、ここにも行われ、借馬遺跡から西側の借馬へ、東側の分水へと漸次集落移動が行われたのではなからうか。ちなみに借馬、分水間には二本の古道が直通して結ばれ(明治四十四年)、その中央地点が借馬遺跡の古田地帯であることが、この経緯を暗示しているのではなからうか。

三、町川(荒沢ノ川)による大町の誕生

平安期に溯る原初の大町は町川の開きかざりによって出発している。町川の取水口位置は、灌漑用の相栓川と並列した水門で農具川より取水し、追分地籍に至る。この間の堰筋は糸魚川街道より分岐する善光寺道に沿っており、秒速〇・四一〇・五mの緩流で水田入を極めて無理なく流下し、素朴な古堰を直観させる。農具川は厳冬中も凍結することなく流下し、ために冬期間の飲料水も安定し、勿論豪雨に

よる取水口破壊のおそれ全くない条件をもつ。更に居谷里湿原の湧水は、中世末期以降その一部水量は、社地区の灌漑水として常光寺、木舟方面へ配水(明末から)したが、それ以前の毎秒水量〇・〇七四平方(昭和六二、四四)は、居谷里沢を流下して町川取水口の直上地点で農具川へ合流する。更に鹿島川に水源をもつ北荒沢の水も、西側より居谷里沢河口と相対した位置で農具川に合流する。二本の自然流が農具川に合流する直下で、原初の木町を創建した町川の取水口が設置されていることに注目したい。古代中世における集落創建、水田開発のため開きされた飲用或は灌漑用の幹線水路の取水口位置が、安定水量を確保するため、二本の沢の合流点直下に設置されている事例は各所にある。或は居谷里の湧水を集水した居谷里沢河口へ、荒沢の自然河道を仁科氏がわざわざ移動して、町川取水口の直上へ合流させ、大町創建の安定水量を確保したのではないかと感知する。

取水口から追分地籍まで約1kmの至近距離である。水量安定した農具川の実態からみて大町創建の唯一の水源として農具川が真先に着目されたのは当然の事実であろう。これに対し猫ヶ鼻に取水口をもつ御所川、町川(南荒沢)は、取水口から町並みまで距離約7km、町川(荒沢ノ川)の延長距離に比し約七倍である。しかも厳冬期飲料水確保のための取水口管理の困難、鹿島川氾濫のための取水口破壊による飲料水涸渇の伝承から推想して、鎌倉時代初期に仁科氏の手による御所川、町川(南荒沢)の開きは、古代に溯る農具川水系の町川より一歩後期であったと推考する。

更に注目されることは、町川より追分地籍で両側へ分派した東西町裏呑堰(筆者の仮称)のうち、西町裏呑堰へ鹿島川を水源とした町川、弾誓寺堰、裏御所川、表御所川の末端がすべてT字型交叉形態で合流している事実(町川西側)である。つまり農具川水系の町川が先行して開きされ、それによる素朴な町

並が存在していたためであり、御所川、町川(南荒沢)は、その後更に大町の発展拡充をねらって開きされた水路であることを実証している。つまり仁科氏が鎌倉初期ここに居館する以前に、農具川より導水していた飲用水路が町川であり、そこへ天正院館址を中心とした都市計画をすめ、仁科庄統治の中心とした際、飲用並びに生活用水路として、新に鹿島川より導水したものと考える。

若一王子神社が仁科庄の総鎮守として、市の北端で、しかも追分地籍の直上に鎮座するの、仁科氏による神社奉祀のねらいが、町川の川筋と追分の重要分水点を、神威と社叢により、鹿島川の洪水から守護し、原初の町並安泰を祈願した鎮座と感知する。

**四、横堰による館之内、松崎の開発**

横堰は町川の取水口より約七〇m下流地点の上花見地籍で農具川より極めて無理なく取水している。取水口附近で堰幅一・三m、深さ〇・七mを示し、微地形に順応して湿地地帯を曲流蛇行し、次第に段丘側壁を通過して、やがて松崎に至って段丘上に到達する。水量毎秒〇・一八立方(昭和六二、四四)、一日の灌漑能力三三・九ヘクタールである。開きのねらいは、東側山地より流下する松崎の荒神沢、湯沢、館之内、常光寺の滝ノ沢等の縦水系のつくる扇状地末端の原始開発水田への灌漑水量補強と、横堰による以外灌漑水を得ることと不可能な、乏水の原野の水田開発であった。

横堰の灌漑範囲(水田四ヶ所)は、社地区における段丘上では、東西の幅が最も広い地域である。仁科氏がこの地を選んで館之内に居館した一つの理由は、横堰開きによる有望な水田開発の見通しをもつたことによるものと推考する。館之内の膳棚・長田・竹ノ花、いかり地籍は、黒粘土の湿地で東西方向の区画線による計画開田の存在を顯示し、芝土手よりなる小型の方形或は長方形の水田が、全城に井然と展開する。明らかに横堰による計画開発水田であり、仁科氏の開田のねらいも、



館之内長田地籍付近の横堰 左側は水路管理道、微地形に順応した屈曲流路が目目される

この範囲が中心であったと感知する。段丘上の堰敷形態は、わずかな土地の高低に順応して微屈曲を示し、古代に溯る古堰を感知する。末端「りようのはし」地籍では、段丘崖に幅約二〇m、深さ約一〇mの巨大なV字谷を形成して、横堰の古さを顯示している。横堰開きの時期は、仁科氏が館之内より大町へ移動して居館した以前であり、平安末期か鎌倉初期に溯るものと推考する。

**五、段丘崖下の古田開発と田川**

宮本、曾根原の段丘崖下の広大な平坦地はおし沢のつくる一直線に延びた四二〇mの天井川の陸に庇護され、高瀬川の強力な乱流もこの天井川を削去し得なかつた安全地帯である。この安全地帯の水田開発をしたのが農具川に取水口をもつ田川である。水田は腐植質に富んだ黒色の肥沃土壌で、一度洪水(水害)すれば平均二三日の保水力をもつ。全城芝土手よりなる水田で約七〇ヘクタールの面積である。ここにある室町時代以前の仁科神明宮にかかわる燈心田、火打田、厚田(祭田)、さき田(棒ヶ田)地名が目目される(仁科氏系図)。段丘崖下に立地する後背湿地の水田は、仁科御厨創設以前の古墳時代に溯ることは、段丘縁辺上の土器並びに古墳が実証している。この範囲が仁科御厨の中心の生産地帯と推考する。高瀬川に接する水田は江戸初期以後の開田が大部分である(田川)。

田川はもと閼田で農具川より取水(やしろ)していたが、現在は町川(池田町用水)より取水している。微地形上取水口位置は戸崎地籍であったと推考する。戸崎とは戸(入口)の崎(先端)、つまり水路先端の取水口に起源をもつ古地名である。若し高瀬川に堤防がなければ、農具川の水を極めて容易に導水可能な凹地溝が、現在も戸崎地籍に往古の姿をとどめ、その末端が町川(池田町水路)の水路に連続している。明らかに田川は、水温高く水量安定した農具川より取水し、おし沢天井川の先端を通過して、段丘崖下の水田へ流下していた。呼称が川名であり、自然流を直観させる。或は田川により農具川の温水を低湿地帯に導水し得た仁科氏が、次の段階に段丘上に横堰を開きかけたのではないかと推考する。

**六、まとめ**

古代の仁科氏は、館之内へ入る以前、木崎湖周辺の森林に、大和朝廷の勢力として入っていた阿部氏であろう(阿部)とする観方からも、巨大なタムの溜池の機能をもつ仁科三湖に発する農具川の水を、知悉していたものと感知する。ために古代、中世に、蓄積した政治力、経済力、統括力によって農具川を軸に開発を促進し、現在の如き耕作影観の基礎を築いたものと推考する。

(以上は大町市史編纂室の史料による)

すれば平均二三日の保水力をもつ。全城芝土手よりなる水田で約七〇ヘクタールの面積である。ここにある室町時代以前の仁科神明宮にかかわる燈心田、火打田、厚田(祭田)、さき田(棒ヶ田)地名が目目される(仁科氏系図)。段丘崖下に立地する後背湿地の水田は、仁科御厨創設以前の古墳時代に溯ることは、段丘縁辺上の土器並びに古墳が実証している。この範囲が仁科御厨の中心の生産地帯と推考する。高瀬川に接する水田は江戸初期以後の開田が大部分である(田川)。

田川はもと閼田で農具川より取水(やしろ)していたが、現在は町川(池田町用水)より取水している。微地形上取水口位置は戸崎地籍であったと推考する。戸崎とは戸(入口)の崎(先端)、つまり水路先端の取水口に起源をもつ古地名である。若し高瀬川に堤防がなければ、農具川の水を極めて容易に導水可能な凹地溝が、現在も戸崎地籍に往古の姿をとどめ、その末端が町川(池田町水路)の水路に連続している。明らかに田川は、水温高く水量安定した農具川より取水し、おし沢天井川の先端を通過して、段丘崖下の水田へ流下していた。呼称が川名であり、自然流を直観させる。或は田川により農具川の温水を低湿地帯に導水し得た仁科氏が、次の段階に段丘上に横堰を開きかけたのではないかと推考する。

**六、まとめ**

古代の仁科氏は、館之内へ入る以前、木崎湖周辺の森林に、大和朝廷の勢力として入っていた阿部氏であろう(阿部)とする観方からも、巨大なタムの溜池の機能をもつ仁科三湖に発する農具川の水を、知悉していたものと感知する。ために古代、中世に、蓄積した政治力、経済力、統括力によって農具川を軸に開発を促進し、現在の如き耕作影観の基礎を築いたものと推考する。

(以上は大町市史編纂室の史料による)

# 大町の人びとと私

小島 隼太郎

遠い昔の話です。ここに登場願う方々は、皆故人となりました。昭和六年の春、烏帽子から野口五郎岳を往復した。ガイドの大和由松君と大町へ下り、下山報告をするべく対山館に立ち寄りしました。対山館の御主人、百瀬慎太郎さんとお定まりのあいさつを交わした

の山へ沈む太陽を意味するや」と質問した。それは本を読めば判ることだから買って読み給え……と、私は答えたが、青年は単に会話を社交のために使用したもの見え、その後本は買っていないらしい。後略、これは多分同じ新聞社の教養もあり、やり手らしい後輩記者とのやり取りを活字にしたものと思われ

話の接ぎ穂に、思いもかけず石川さんが登場した。退屈しているであろう石川さんの話相手になつてくれ位の、慎太郎さんらしい心遣いのこまやかさであった。石川さんとは、東京は有楽町の東京日日新聞(毎日新聞の前身)で二、三回雑談を交わしたことがあつたので、それではと、御邪魔することにした。私は、大町生れで有明育ちの大和君と一緒に、三階の石川さんの部屋に入った。こたつに足を突っ込んで、一、二時間黙弁した。座持ちのうまい大和君が同席すると、にぎやかになる。その時、御ち走になった紅茶の、なんとも言いようのない芳香は、けだし絶品だった。

あの穏やかな、人当たりが柔らかい石川さんに、シニカルな眼を凝視して、思わずニヤリとせざるを得なかつた。山の本はゴマンと出版されているが、知的で豊かな人間性のあつた石川さんの山の随筆に迫るものは、残念ながらそう多くはない。氏の父上は、著名な動物学者で、東大名誉教授理博石川千代松氏である。慎太郎さんの遺稿集「山を想へば」に、先生の慎太郎さん宛書信が収録されている。石川父子二代に渉る対山館との親しい付き合いの跡が、たどれます。

あれは石川さん持ち込みの、スコッチ一、二滴のなせる業だったに違いない。大町思えば壮麗な双耳峰、鹿島槍の白銀の輝きと、あの時のほのかな香氣が重なり合つて、私の遠い記憶となつてゐる。

欣一さんと慎太郎さんとの交歓風景は、欣一さんが書いたものを「読めば判る」ので、ここでは敢えて触れません。「山へ……」の序文から抜き書を書きます。若山牧水は晩酌の時のたのしみに、一日中一生懸命に仕事していったという。私は山に入る日をしたのしみに一年中仕事をしていってよい。幸い少数ではあるが、逃げ込む私をむかえてくれる山々と人々とがいて。その「むかえてくれる人々」の筆頭が、慎太郎さんであつたことは言うまでもない。大町は石川さんの生まれ故郷のような土地で、そこで精神的な疲れを癒やしたの、彼の文章から覗える。

「石川欣一著『山へ入る日』(中央公論社、昭和四年刊)は、その後、上梓された同氏著『山・都会・スキー』と共に私の愛蔵本になつてゐる。筆づかいは軽妙、都会的なセンスを盛りこんだ随筆集である。こんな調子です。私は主として山に関する雑文を集め、『山へ入る日』という題をつけた小さい本にした。あるスマートな現代的青年が「これは足下が山へ入るその日のことを意味するや、又は西

つた。〈山を／想へば／人恋し／人を想へば／山恋し〉と六行の縦書で、のれんの上部に山なみをあしらい、唐松の連なりが下部に描き出されている。口ずさめば、語呂が良い。歌人の名前はない。「山を想へば」は慎太郎さんの遺稿集のタイトルであるのに、気がついたのは帰宅してからのこと。早速、本を手にとり、表紙を開いたら、朝日新聞の切り抜き(昭和三十九年九月二十三日付書評欄)がでてきた。アンダーラインを鉛筆で引いた部分にこうある。〈この本の題名「山を想へば」は、著者が生前好んで口にしていた「山を想へば人恋し」という、ざれ歌から取つたものだからといわれる〉。

なぜ、歌の作者名をのれんに入れないのでしよう。また生地も化繊の代りに、厚手の木綿を使つてもらいたかつた。山登りの世界で明治、大正、昭和の三代にわたり、大町の顔であつた慎太郎さんに、敬意を払つても罰は当たらない。話ささかのぼる。なぜ筆者が石川さんの本に引きつけられたのか。昔、学生時代に「山に入る日」を入手した時、「私のアイヌアックスはチューリッヒのフリッツ製」という文句が最初に眼にとまつた。実は筆者も、その年、北アの雪渓でグリセードなるものを試みると、フリッツを買つたばかりだった。彼もフリッツ我もまたフリッツといつた趣で、なによりやら親近感がわいた。これが石川さんと私の出会いで、フリッツが引き合わせてくれた御縁と言えます。

「アイヌアックス」を語る石川さんの言葉を借ります。(私はこのアイヌアックスが非常に好きである)、時々酔つぱらうと戸棚から出す。そして山を思えば私はアイヌアックスを愛撫すると言う。大町が慎太郎、欣一両氏交遊の懸け橋となり、一方の歌人慎太郎さんは、山紫水明の大町の地で〈山を想へば……〉と、ひたむきだが、平明に詠みます。かたや欣一さんは〈山を思へば……〉と都会的哀

## 博物館だより

(藤沢市鵜沼海岸)

山博友の会 ファミリーキャンプ  
友の会では7月18日にオープンした東山低山帯野外博物館「山の子村」で、きたる8月27、28日の両日、ファミリーキャンプを行います。詳細な照会は、山博友の会事務局(山岳博物館内)にお問い合わせ下さい。

東山低山帯野外博物館オープン  
数年来準備が進められてきた、野外博物館が山岳博物館カモシカ園隣りにオープンしました。  
主な施設は自然観察路、小島の森、シヤクナゲ園、かのが池、山の子池、北アルプス展望広場、シラカバ広場、林間教室、野外ステージ、モミの高地、芝生広場、パーキユー広場、キャンプ場、冒険広場、村役場(案内売店)、山小屋、インディアンテント、炊事場が20ヘクタールの敷地の中に配置されています。

お問い合わせは、電話0261212106  
23(野外博物館事務所)  
山と博物館 第28巻 第7号  
一九八三年七月二十五日発行  
発行所 長野県大町市 TEL.0261-2111  
大町山岳博物館  
印刷所 長野県大町市 大糸タイムス印刷部  
定価 年額一、二〇〇円(送料共(切手不可))  
郵便振替口座番号 長野四一三三九二